

ハイ デイ

(第二回)

東京女子高等師範學校教授

津 田 芳 雄 譯

「しやうのない子だね。一體さういふ氣なんだから。さうして着物をぬいだんです」ミデーテは腹立たしさうに叫んだ。

「わたし、着物なんかいらななんだもの。」

ハイデイは一向平氣である。

「お馬鹿さんね。さうかしてるわ」をばさんは吐るやうな困つたやうな口調で云つた。

「誰が降りて取つてくるの？ 半時間もかゝるのに。ペーテル、あんた駈けつて行つて取つて来てよ。そこでぼかんミ口をあけてゐないで。」

「あらあ、おそくなつちまつたんだ。」

ペーテルは兩手をポケットに突つこんで、ハイデイのをばさんが怒るのを聞いてゐるが、そこか

ら動かうこもしなかつた。

「ほら、いゝものをあげるが」ミ云つてデーテがきら／＼する白銅を出して見せるさ、ペーテルはいきなり駈け出して、最短の近道をして見る／＼例の着物の小積コヅミの所まで行つて、それを持つて来た。不機嫌であつたデーテもさすがに約束の白銅を渡しながら褒めてやつた。ペーテルは早速それをポケットにしまひこんで、にこり／＼喜んで、そんな大金を持つこゝは滅多になかつたのである。

「同じ道だから、をぢさんの所までその包を持つて行つてね」デーテはペーテルにさう云つて、山羊飼小屋ウツロの後から急に噓しくなつた山道を登り出

した。ペーテルは直ぐに承知して左の小脇に包を抱え、右手に管をふりながらデーテの後に續いた。するこハイディも山羊達は嬉しうにその側を跳んだりはねたりして登つて行つた。

小一時間も登つた頃彼等はアルムをぢさんの小屋の在る所に着いた。をぢさんの小屋は突き出た岩の上に立つてゐて、風に吹きさらしであるが、日當りは上々、それに下の谿は一目に見わたされる。小屋の後には枝も延び放題の茂つた古い樅の木が三本あつて、その向ふは又峻しい山になつてゐる。その低い方はまだ美しい草原や、樹木におほはれてゐるが、段々番木だけになり、上の方は裸岩の頂上に終つてゐる。をぢさんは小屋を背にして、谿を見おろすやうになつた所に腰掛をしつらへてゐるのであつたが、今それに腰を掛けて、煙管をくはへ靜かに下を見晴してゐる所であつた。するこ突然、子供達だの、山羊だの、デーテだのが眼に入つて來た。やがてハイディがまづ先によつて來て、いきなりをぢさんの所へ行つて、

手をさし出しながら「おちいさん今日は」云つた。

「どうしたのぢや。」

をぢさんはちよつと握手をしながらぶつきらばうに云つて、しげ／＼ハイディを眺めた。ハイディも隠せずをぢさんの白毛まじりの鬚だの眉毛だので藪みたいな顔を珍らしうに眺めた。そこへデーテがペーテルと一緒に登つて來て、

「をぢさん今日は。あなたの孫をつれて來ましたよ。赤ん坊の時しか見ていらつしやらないから、わからないくらゐでせう。」

「この山の上で、この子がおれに何の用があるといふのだ」をぢさんは訊ねた。それからペーテルに向つて、「おまへ、そこに居るのか。さつさこ山羊をつれて行かんか。今日はおそいぞ。おれのも、つれて行くんだぞ。」

ペーテルはをぢさんからにらまれて直ぐに云ふことをきいて姿を消してしまつた。デーテはそこで「今日からこの子はをぢさんの所で暮すのです。」

わたしはもうこの四年間でわたしの義務は果たしたと思ふわ。今度はをぢさんの番よ。」

「さうか。だが、この子がお前を追つてむづかつたり泣いたりし出したらさうする？」

「それはわたしの知らないことよ。わたしだつて手一杯の所へ、赤ん坊のこの子を背負はされたけれど、今までこぼさないで我慢してきたわ。今度わたしは奉公に出ることになつたのでつれて来たんだわ。この子に一番近いのはをぢさんでせう？をぢさんが養へなかつたら、をぢさんの方で何ごでもするがいゝわ。この子に間違が出来たらをぢさんの責任よ。をぢさんにはもう氣の咎めることは澤山だらうけれぎね。」

所で、デーテの方でも、果してこんなことをしていゝのか、氣が咎めないでもなかつた。それでつい腹立まぎれに氣のないこゝまで云つてしまつた。デーテがこの最後の言葉を云ひ終るを、をぢさんはすつくま立上つて、デーテを睨みつけ、デーテを思はず一二歩後ひざりさしてから腕を突出

して命令するやうに云つた「さあ行つてしまへ。今直ぐ行つてしまへ。二度もおれに顔を見せるな。」

デーテは二度云はれるまでもなく、「それではきようなら。ハイディちゃんもさようなら」云つて直ぐに駆け出した。デルフリの村に着くまでは一氣に駆け降りて行つた。何だか胸の中にくらくしてゐる蒸氣機關にかりたてられる思ひであつた。村に着くまゝ又戸口からも窓からも質問の雨である。「あの子はさうしたの？」「あの子はさうにゐる？」

「アルムをぢさんの所よ。あの山の上だよ。前にさう云つて置いたぢやないか。」

するま女達は今度はデーテを悪く云ひ出した。

「さうしてあんた、そんなこゝが出来るの」「あんな幼い子をアルムをぢさんの所へ残して来るなんて」「可哀相だく。」

デーテは堪えきれなくなつて聲が聞えなくなる所まで又駆けつて行つた。彼女は自分のしたことを考へて決して嬉しくはなかつた。お母さんが亡

くなる時に「この子を頼む」云はれてゐてみれば。けれども、お金を澤山稼いだらもつゝあの子の爲になれるからと思つてみて自分の心をなだめた。それにこんなに騒いでゐる人達からはやがて遠く離れるのだからと思ふことは一つの慰めであつた。更にあんないゝ口にもう自由に就けることになつたといふことは彼女にまつて、より大きな喜であつた。

二、山の上のおぢいさんの生活

デーテが見えなくなるにおぢいさんは腰掛に戻つて、黙つて地面を見つみながらしきりに煙草の煙をたてゝゐた。一方ハイディは珍らしいあたりの景色に見されてゐた、やがて家に建てかけた山羊小舎を見出して空つぼの中をのぞき込んだりした。ハイディは更に搜索を續けて家の後の樅の木の所へ来た。樅の木にはひきく風が吹きつけてゐて、上の方の枝はごうくごうくきたいした音をたてゝゐた。ハイディは暫く停つてそれを聴いてゐたが、その音がおだれると又歩き出して、家の向

ふの角まで行き、それを廻つて結局又元のおぢいさんの所へ来た。見るにおぢいさんはもこの通りの姿勢をしてゐる。ハイディはその真前に行つて立つた。そして手をうしろに組んでおぢいさんをぢつと眺めた。おぢいさんは顔をあげたがハイディはまだ身動きもしないで眺めてゐる。それでおぢいさんは「何が欲しいかね」とたづねた。

「おうちの中を見せて。」

「ぢや、おいで。」

おぢいさんはやつと立上つて先に家の方へ進んで行つた。がその時

「着物の包を持つておいで。」

と云ふおぢいさんは躊躇もなく

「あんなもの、わたし、もういらぬ。」

と云ふ、おぢいさんは變なこゝろと思つて振返つて見るに、子供の黒目は「家の中に何かあるかなあ」と云つた目つきで喜びに輝いてゐる。おぢいさんは「これは確かに馬鹿ぢやない」と思つた。そして

「どうしてあの着物はもういらないんだ？」
と尋ねた。

「わたし、細い軽い足をした山羊のやうに駆け廻りたいの。」

「そりや、さうしたければ、さうしていゝが、着物は持つておいで。戸棚に入れて置かなくちあらんから。」

おぢいさんがさう云ふまゝ、ハイディは云はれるまゝにした。

家に入つて見るまゝ、中は一階全部一間の相當大きな部屋になつてゐて、家具はテーブル一つに椅子一脚だけ。一方の隅にはおぢいさんのベットがあり、片一方には爐があつて、その上に大きな鍋が吊してある。向ふ側の壁には大きな戸がついてゐて、これが戸棚なのだつた。おぢいさんはそれを開けて見せるまゝ、一番下の段には着物を吊したり、シャツやハンケチや靴下を棚の上に重ねたりしてあつた。次の段にはお皿や、コップやガラス器が置いてあり、又その上の棚には丸いパンや、

燻し肉、チーズなどが置いてあり、おぢいさんの着るもの、食べるもの全部がこの戸棚の中にしまつてあるのだつた。ハイディは早速駆けよつて自分の着物の包をおぢいさんの着物の出来るだけ奥の方にしまひ込んだ。かうして自分の着物が容易に見つからぬやうにする積りなのだつた。それから注意深く部屋の中を見廻しておぢいさんにきいて見た。

「おぢいさん、わたしはまゝここに寝るの。」

「まゝにでも好きなまゝここに。」

おぢいさんからかう云はれるまゝハイディは喜んだ。そして直ぐにまゝに寝たが一番好いかま部屋を隅から隅までしらべ始めた。やがておぢいさんのベットの傍の隅に梯子が壁に立てかけてあるのを見出した。それをのぼつて見るまゝ上は屋根裏の枯草置場になつてゐて、いゝ匂のする枯草がいっぱい積んであり、一つある圓窓からは下の谷が真下に見えるのであつた。ハイディは大悦びで下のおぢいさんに叫んだ。

「おぢいさん、わたしこゝに寝るわ。あがつて来てごらん。さても素敵よ。」

「あー、あがらなかつてわかるよ。」

「おぢいさんが下からさう答へるさ、ハイディはかさこそ頻りさ何かしながら又叫んだ。」

「わたし、今ベットを拵へてゐる所よ。だけさ、シートを持つて来ておくれよ。シートがベットには要るでせう。」

「はいよ。」

おぢいさんはさう云つて戸棚の中を探して、一枚の長い粗い羅紗を引出し、それを持つて屋根裏にあがつて見るさ、ハイディはもうすつかりベッドを拵えてゐた。しかも枕になる所には餘計に枯草を置いてその所を高くして居り、寝た時にはちようき圓窓から樂に外の景色が眺められるやうにしてゐた。

「これは上等ぢや。さあシートを敷かう。だが待てよ。」

かう云つておぢいさんは更に一抱へ枯草を持つ

て来て、堅い床ユカの上の枯草の厚さを増してくれた。それからおぢいさんが重い粗い羅紗を枯草の上に引張つたり、ハイディが長過ぎる所をたたみ込み込んで一通りきちんとしたベットが出来上つた。ハイディはそれをちよつこ眺めてゐるが

「ねえ、おぢいさん、何か忘れたものがあるわ。」

「何ぢやい。」

「掛布團よ。シートと掛布團の間に這入るのでせう。」

「さうぢや、だがその掛布團が無かつたら。」

「さう、ぢや、構はないわ、おぢいさん。枯草をもつこ持つて来て、かぶつたらいゝから。」

ハイディは慰めるやうにさう云つて、枯草を運ばうとした。するさおぢいさんが、

「ちよつこお待ち。」

さう云つて、梯子を下りて自分のベットの所へ行つて、大きな厚い麻の袋をこつて上つて来た。

「それ、枯草よりもいゝだらう。」

ハイディは早速、それをベットの上に延べよう

こ、一生懸命引ばつた。が、さうして子供の手に及ぶものでない。おちいさんが手をかして、きちんミひろげらて見るミ如何にも、温かさうな寢床になつた。ハイディは嬉しさうにそれを眺めて、「もう夜だつたらいゝわ。今直ぐ寢たい。」と云つた。

「それより、先に何か食べたがよからう。さうぢやね。」

ハイディは寢床のこゝで夢中になつてゐただが、食物のこゝを云はれてみるミ、急にお腹がすいてたまらなくなつた。ハイディは今朝早く長い暑い旅に立つ前に、パンミ咖啡の朝食をこつたきりであつた。それでわけもなく賛成して「さう、わたしもそれがいゝわ」と云つた。

おちいさんはハイディを先にして屋根裏から下りるミ、爐の前に行つて大きい鍋を押しつけ、同じやうに鎖に吊した小さい湯沸を引ぱり出した。それから爐の前の三脚腰掛に腰をおろして、火を赤く吹きたてた。湯沸は間もなく沸いて來た。そ

の間におちいさんは長い金串にさしたチーズの大きさを、くるく廻しながら火にあぶつてゐた。

ハイディは珍らしさうにおちいさんのするこゝを眺めてゐるが、急に何か思ひついたらしく、戸棚の方へ駆けて行つて頻りさあちこち動いてゐた。

やがておちいさんが立上つて湯壺ミチーズを持つてテーブルの所へ來て見るミ、テーブルにはもうちやんミ丸いパンミ二枚の皿ミ二本のナイフミがそれ／＼の位置に置いてあつた。

「あーえらいよ、よく氣がきくね。」

おちいさんはチーズをパンに載せながら更に

「だがまだ何か足りないものがあるね。」

ハイディは湯壺が盛んに湯氣を立てゝゐるのを見て直ぐミ戸棚へ駆けつけた。ちよいミ見るミ小さいお椀だけ棚に残つてゐるやうだつたが、よく見るミ、その奥にガラスのコップが二つあつた。ハイディはこの三つを持つて來てテーブルの上に置いた。

「よろしい、よく物が分つてゐるね。だが腰掛は

でござる？」

部屋にあるたつた一つの椅子にはおぢいさんが掛けてゐた。するまハイディは爐の所へ飛んで行つて例の三脚腰掛を持つて来て、それに掛けた。

「さあ、それでお前の掛けるものも出来た。が、ちよつと低過ぎるだらう。だが、わしの椅子をやつても、まだお前はテーブルには届くまい。まあいゝさ。先づ食べへるこぢや。さあ。」

かう云つておぢいさんは立上つてお椀にお乳をいつぱい注ぎ、それを自分の椅子の上に載せて、三脚腰掛に掛けてゐるハイディの前に押し出した。これでハイディの食卓は出来たわけ。それからまた、おぢいさんはパンの大きな切ミチーズミを持つて来て、おあがりミ云つた。そしておぢいさん自身はテーブルのはしに腰掛けて自分の食事をした。

ハイディは両手にお椀を持つてお乳をいきに飲んでしまつた。それから「はーつ」ミ呼吸をしてお椀を置いた。

「お乳、おいしかつたね？」

「こんなおいしいお乳、飲んだこはじめて。」

「ぢや、もつとおあがり。」

おぢいさんはまた、ハイディのお椀にいつぱいお乳を注いでやつた。ハイディは焼けて柔らかになつたチーズをパンの切につけ、お乳ミかはりばんに飲んで食べたりして、如何にも満足さうな顔であつた。食事がすんでおぢいさんは山羊小舎の手入れに出て行つた。ハイディはおぢいさんが先づ小舎を掃きだし、それから山羊の寢床ミして新しい藁を敷いたりするのを面白さうに眺めた。それからおぢいさんは吹き井戸の所へ行つて、長い圓い棒を三本ミ、圓い板を一枚切り、その板に穴をあけて棒をはめ込んだ。たちまち魔法で出来たやうに、おぢいさんのよりすつと高い三本脚の腰掛が出来上つたのだつた。ハイディは呆氣にさられてそれを眺めてゐた。

「これは何だらう？」

「わたしの腰掛よ。こんなに高いんだもの。すぐ

に出来つちまつたのねえ。」

ハイディは尙も感心してしまつてゐる様子。

「この子は眼が見える。目のあり所が間違つちや
るない。」

おぢいさんはさう思ひながら、尙も家を廻つて、
そこゝに釘を打つたり、戸を直したりした。ハ
イディはおぢいさんのあこについて廻つて、おぢ
いさんのするここを何んでも面白く思つた。

お断り

前回はハイテと書きました。原作の發音をよく正確
に寫す爲に、今回からハイティと致しました。

尙、ハイティの年齢は精々満五歳なのですから、數
へ年六歳そこゝと御承知下さい。前回の「七歳そ
こゝ」といふのを訂正致します。

